ヒュームに於ける「外界」と「自我」の問題 (一)

田中　進

ヒューム (David Hume) の『人性論』(*A Treatise of Human Nature*) 全三巻のうち、第一巻 (Book I: *Of the Understanding*) は、その表題が示すように、いわゆる認識論の分野を扱っている。そして、この第一巻に於て、「因果関係」の分析とならんで、主要なテーマの一つをなしているのが、「外界」及び「自我」の問題である。ヒュームのこの問題に対する立場は、その到達した最終的な結論にのみ着目するならば、極端な現象主義であると解し得るかも知れない〔cf. 265(2)〕[1]。しかし、ヒュームによるこの問題の扱いは相当に複雑であって、その真意がどこにあるかを見分けることは必ずしも容易ではない。私自身の解釈をごく大ざっぱに述べれば次のようになるであろう。すなわち、「外界」及び「自我」の問題についてのヒュームの見解は、基本的には、ロックと同じく、実在論を基盤とした二元論であるが、「外界」の問題に関しては、ロックと比較すれば、懐疑論または不可知論の色合いが濃く、一方、「自我」の問題に関しては、実体としての自我なる概念に対して（この場合はむしろ）否定的である、ということである。以下、「外界」及び「自我」についてのヒュームの議論をややくわしく見るとともに、その中に含まれるいくつかの問題点を検討していきたいと思う。

(1)　以下、『人性論』への言及は次書による：David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. L. A. Selby-Bigge (Oxford). この場合、〔265(2)〕という仕方で表わすが、これは、同書 p. 265 に於ける二番目のパラグラフの意。また、〔Book I, Part I, Sect. I〕という仕方で表わすこともある。

一　知覚

ヒュームは、我々の心には「知覚」(perceptions) 以外のものは何も現れないことを強調する〔67(4)—68(2)〕[1]。すなわち、ヒュームによれば、我々がそれによって知識を構成すべき手持ちの材料は知覚のみ、なのである。このような前提からすれば、知覚と種類の異なる何物かたる外的対象あるいは自我、なる概念が、我々の知識のうちに占める場はない、という結論が生じるのは当然であるように見える。そして、事実ヒュームは、我々に与えられたかぎりでの外的対象及び自我なるものを、諸知覚（あるいは、外的対象に関して言えば、少くとも感覚的性質：sensible qualities）[2] の束ないし集合へと解消してしまうのである〔219(2), 252(3)〕。

しかし、ヒュームが、我々の心には知覚のみしか現れない、と言う時、そこで言われている「知覚」とはどのようなものであるのか、という点を明確にしないかぎり、問題の所在があまりはっきりしない。従って、ヒュームが知覚と呼ぶものについてあらかじめ少し見ておくのが便利であろう。

ヒューム自身は、我々がすでにそれが何であるかを知っているかのように議論を進めていくだけであって、自分の言う知覚なるものに対してあらためて明瞭な定義を与えようとはしていない。しかし、これには理由がないわけではない。なぜなら、ヒュームが知覚と呼ぶものは、我々の直接的な経験を通じてのみそれが何であるかを知り得るようなもの、いやむしろ、我々の直接的な経験そのものをなすもの、であるからである。我々が何事かを経験するあるいは意識するかぎりに於て、我々はヒュームの言う知覚が何であるかを直接的に知っているのである〔cf. 190(2), 212(2)〕。

ヒュームは、知覚を「印象」(impressions) と「観念」(ideas) とに分類する〔以下、Book I, Part I, Sects. I—II〕。印象と観念との違いは、両者が心に現れる時それらに伴う勢い（force）[3] の程度にある。すなわち、印象とは、

非常に強い勢いを伴って現れる知覚であり、すべての感覚（sensations）と情念（passions）とがこれに含まれる。ヒュームは、前者を感覚の印象（impressions of sensation）、後者を内省の印象（impressions of reflexion）、とそれぞれ呼ぶが、因果関係から言えば、つまるところ、前者が後者の原因であるとされる〔Sect. II〕。一方、観念とは、これらの印象の淡い像（faint images）であって、考えたり推理したりする時に我々の心に現れる。ヒュームによれば、印象と観念との区別は、誰もが自分自身でみてとれるところの、感じること（feeling）と考えること（thinking）との違いが説明する、という。ヒュームは更に、印象と観念とをそれぞれ単純なものと複雑なものとに分けた上で、印象と観念との間には次のような二つの関係があると主張する。すなわち、第一に、一つの単純印象は、勢いの程度をのぞく他のすべての点に於て全く自分と似ている一つの単純観念を持ち、また逆に、一つの単純観念は自分と似ている一つの単純印象を持つ、ということ、第二に、これら互いに似ている単純印象と単純観念との間には因果関係があり、かつ、前者（印象）を原因として後者（観念）が生じる、ということ、この二つの関係である。印象を原因として観念が生じるというヒュームの主張が、すべての知識は感覚的経験から来るという経験論の基本的主張のヒューム的表現であることは言うまでもないであろう。

さて、知覚の二つの種類である印象と観念との違いは、上で述べたように、感じることと考えることとの違いに対応する。ところで、ここでごく常識的に、主観（「心」）と客観（「もの」）という二元的な枠組から見るならば、感じることと考えることとはいずれも主観に属する働きであるとみなされるであろう。このような見方からすれば、ヒュームの言う知覚とは、客観そのものではなく、主観がそれを通じて客観とかかわるところのもの、すなわち、いわゆる表象、であると解し得る。そして、ヒュームの言う知覚をこのように解することは、ヒュームが一般に知覚をイメージであるとみなしていることと調和する〔cf. e. g. 1(1), 6(2), 27(2)—28(2), 189(1)—(2), 239(2)〕。「外界」及び「自我」の問題についてのヒュームの議論の中心をなしているのは、このような表象ないしイメージとしての知覚に対し

て客観と主観とがそれぞれどのような関係に立つか、という問題の分析であり、この点に関しては、後に「外界」及び「自我」というそれぞれの主題に即して詳述するつもりである。ただここでは、知覚と、客観及び主観との関係について、次の二つの側面から予備的に述べておきたいと思う。すなわち、第一に、いわゆる「志向性」(intentionality)との連関に於て、第二に、いわゆる「知覚の因果説」との連関に於て、それぞれ述べることにする。

まず第一の側面、すなわち、「志向性」の問題について。ここでは、「志向性」ということによって、意識が持つとされる次のような特性をさしあたって指すことにする。すなわち、一般に一つの意識は何物かの(について:of)意識である、と言われるそのような意識の特性である。この意味に於ける「志向性」を、ヒュームは自分の言う知覚に関して明瞭な仕方では述べていない。あるいは、この点をもっと強くとって、ヒュームは「志向性」ということに関してはむしろ否定的であると解する方がヒュームに即していると言われるかも知れない。しかし、ヒュームの論じている事柄に即して見るならば、知覚に関して、意識とその対象という二元性の問題がやはり現れてきているとみなすことができる。ヒュームに於けるこの一元論的見解と二元論的見解との共在が最も端的な形で見出されるのは彼の「信念」(belief)の説[4]に於てであろう。

先に述べたように、知覚の二つの種類である印象と観念とは、それらに伴う勢いの程度によって区別されるが、この両者に伴う勢いの程度の差は、「信念」ということに関する次のような両者の違いに関係する〔cf. Book I, Part III, Sect. VII〕。すなわち、印象には、何物かの存在を信じるという心の働きが伴うが、観念には、一般に、そのようなものは伴わない、という違いである。そして、ヒュームによれば、印象に伴うこの信じるという心の働きと、印象に伴う強い程度の勢いとは、まさに同一であるという〔86(3): cf. 116(2)〕。以上のような考え方に沿って、ヒュームは更に記憶観念や想像観念に伴う「信念」の解明を行なっている。さて、印象に議論をしぼるならば、ヒュームが、印象に伴う信じるという心の働きと、印象に伴う強い程度の勢いとを、同一であるとみなしている点に於ては、印象に関

するヒュームの見解は一元論的である。そして、ヒュームのこのような見解は次の二点から生じてきていると思われる。(1)我々の心には知覚のみしか現れないとヒュームがみなしていること。この点に関しては、「知覚の因果説」との連関に於て、後述する。(2)我々は、一般に、印象そのものに実在性（現実性：reality）を与えているとヒュームがみなしていること〔108(1)〕。――しかし、事柄を、意識とその対象という二元的な枠組の中でとらえないかぎり、「信念」という事態が持つ構造を明確にすることは困難である。このことは次の点から明らかであろう。すなわち、印象に伴う信じるということは、印象そのものの存在を信じるということを意味することはできず、印象を通じて何物かの存在を信じるということを意味し得るのみである、という点である。なぜなら、印象そのものが存在するという意味に於ては、まさに観念も存在する、からである〔cf. 66(2), 105(2)—106(3)〕。

上で述べた、印象に関して現れる、意識とその対象という二元性は、感覚すること（sensing）と対立する意味に於て言われる知覚すること（perceiving）に一般に含まれている事態であると解することができよう。このような観点から言えば、「自我」は知覚する側に現れ、一方、「外界」は知覚される側に現れる、ということになるはずである。しかし、ヒュームにとって、印象はやはり一枚でしかない。換言すれば、ヒュームにとって、印象とは次のような性格のものに他ならない。すなわち、(1)印象を通じて知覚されるとされ、かつ、印象の原因であると目されるところの何物か、つまり、いわゆる物理的対象、の存在を印象は何ら指示しないということ、(2)何らか実体的な自我なるものに依存することなしに印象は存在し得るということ。――ところで、ヒュームが印象を上のような性格のものとみなしている点に於て、問題が「知覚の因果説」とかさなってくる。そして、「志向性」に関して一元論的見解と二元論的見解とが共在しているのに平行して、「知覚の因果説」に関しても、ヒュームのうちには、否定的見解、もっと正確に言えば、懐疑的見解、と、肯定的見解とが共在しているのが見出されるであろう。更に、我々の心に現れるすべてのものは知覚であるというヒュームの基本的主張の持つ意味合いが、「知覚の因果説」に関するヒュームの二つの

見解に応じてゆれ動くのが見出されるであろう。つづいて、「知覚の因果説」に関するヒュームの見解を見ることにする。(5)

「知覚の因果説」ということによってここでは次のような考え方を指すことにする。すなわち、我々がある物理的対象について一つの（ヒュームの用語で言えば）印象を持つと言われる時、まず、この印象は、一般に、その物理的対象から発した何らかの因果的連鎖の最後の結果として生じるが、加えて、その因果的連鎖のうち最後の結果をのぞけばすべて物理的及び生理的な過程に属している、とする考え方である。このような意味に於ける「知覚の因果説」に関して、ヒュームのうちには、上述のように、懐疑的見解と肯定的見解とが共在する。まず懐疑的見解から見ることにしよう。

ヒュームは次の二つの原理を承認する〔以下、232(2)—234(1)：cf. 251(2)—253(1), 633(2)—635(3)〕。(1)およそ明晰に（心によって）想われるもの（すなわち、矛盾を含まないもの）は（実際）存在し得る（whatever is clearly conceiv'd may exist）し、また、およそある仕方で明晰に想われるものはその仕方で存在し得る（whatever is clearly conceiv'd, after any manner, may exist after the same manner）〔cf. 32(3)〕。(2)すべて異なるものは区別でき、すべて区別できるものは想像（ないし思考、心）によって分離できる〔cf. 10(1), 18(2)〕。——この二つの原理を知覚の場合にあてはめれば次の結論が得られる。すなわち、我々の知覚はすべて、相互にかつ他のいかなるものとも異なるから、それら知覚はまた相互にかつ他のいかなるものとも別個（distinct：区別できる）であり分離できる、それ故、心はそれら知覚が分離して存在すると考え得る、従って、それらは分離して存在し得る、換言すれば、それらはその存在をささえる他の何物をも必要としていない〔233(3)〕。知覚についての以上のようなヒュームの見解は、実体としての自我、つまり、すべての知覚（印象と観念）がそれに帰属しかつそれ自体は単一であるような自我、という概念を批判するために提出されるが、この際、ヒュームは更に、そのようなものとしての自我を我々は経験の対象として

持っていないという不可知論的見解をつけ加える。このようなヒュームの考え方が、後に見るように、「人格の同一性」(personal identity) に関して難問をひきおこす。と同時に、上の、知覚が分離して存在し得るという見解が、いわゆる「知覚の因果説」をもまた破壊することはすぐに見てとることができよう、なぜなら、すべての知覚は、常に、何物にも依存することなくそれ自体で存在し得るからである〔cf. 233(3)〕。ただし、このことは別に知覚にかぎってそうであるばかりではない。ヒュームに従えば、一般に「因果関係」とはそのようなものなのである。「因果関係」についてのヒュームの見解の核心は次のところにある。すなわち、「事実」(matters of fact) に関して、経験の直接与えるところを越えて、我々が推論し得る唯一の基礎は「因果関係」であるが、原因と結果との間には（論理的な意味に於て）必然的な結合 (necessary connexion) が見出されぬ故に、原因と結果とを結ぶ必然性は、原因と結果とが過去に於て常に連なっていた（恒常的連接：constant conjunction）という経験から生じた習慣にもとづく心理的拘束性によってのみ説明される、ということである。[6]「因果関係」一般に対するこのような考え方からすれば、「知覚の因果説」がその例外ではあり得ないのは明らかであろう。

さて、すべての知覚がそれ自体で存在することができ、かつ、そのようなものとしての知覚のみしか心に現れないとするならば、このことは、いわゆる外的（物理的）対象に関する我々の知識を一切不可能にしてしまうことになるであろう。まず第一に、外的対象は、それを直接的に知覚するという仕方では知り得ない。なぜなら、印象を通じて知覚するとされる外的対象があるいは存在するとしてもあるいは存在しないとしてもどちらの場合にも印象そのものには何の変化も生じない、逆に言えば、印象は常に一枚であって、外的対象の存在を少しも示唆しない〔cf. 189(2)〕、からである。第二に、外的対象は、推論するという仕方でも知り得ない〔212(2): cf. 193(2)〕。ヒュームに従えば、事実に関して我々に推論を許す唯一の基礎は「因果関係」である。一方、「因果関係」の観念を我々に与える唯一の事情は、原因と結果との恒常的連接という過去の経験である。しかし、心には知覚しか現れない故に、知覚と知覚との

間には恒常的連接を観察し得るが、知覚と外的対象との間には恒常的連接を観察し得ない。従って、心に現れる唯一のものである知覚の存在から、「因果関係」にもとづいて、外的対象の存在を推論することは不可能であるということになろう。――以上のような立場、すなわち、「知覚の因果説」に対する懐疑的見解に加えて、外的対象についての経験的知識を我々は持ち得ないとする不可知論的見解をとることにより、「知覚の因果説」及び外的対象に関する一切の知識を認めない立場、を、「外界」の問題に対するヒュームの第一の立場としよう。

しかし、ヒュームは、一方に於て、「知覚の因果説」が主張するような仕方で知覚（印象）が生じることを経験的事実として肯定する。『人性論』の全体の議論の出発点では、ヒュームは、感覚の印象に外的原因があるのは当然と考えているが〔Book I, Part I, Sect. II: cf. 275(1)—276(1)〕、更に、「外界」の問題を正面から論じる段になると、「知覚の因果説」をむしろ強調しさえする。ただし、ここで注意しなければならないのは次の点である。すなわち、ヒュームが外界に関して「知覚の因果説」を強調するのは、外界に関して何らかの明確な知識に我々が到り得るということを主張したいがためではなく、逆に、そのような知識に到り得ないということを主張したいがためなのである、ということである。ヒュームは、「因果関係」の観念を我々にもたらす唯一の事情である恒常的連接が、いわゆる物質（matter）ないし物体（body）と知覚との間に（特に、身体の場合に於て）確かに経験される、と承認する。すなわち、このかぎりに於て、物質ないし物体は知覚の原因で事実ある、のである〔246(3)ff.〕。しかし、ここからヒュームが引き出すのは、外界に関する不可知論的見解なのである。ヒュームは、いわゆる外的対象と身体との間の相対的関係（例えば、距離）や身体の状態（例えば、病気）に応じて知覚（印象）が変化する故に、これらの知覚はすべて身体に依存して存在する、と認める〔210(3)—211(1)〕。「我々の知覚はすべて、我々の諸器官、及び神経と動物精気の具合に依存していることを、我々は明瞭に看取する」〔211(1)〕。ヒュームは、この、印象が身体に依存しているということをもって、同時に、印象が心に依存している（心のうちにあるという仕方でのみ存在する）ということを意味

させているようである。[7] さて、印象が身体ないし心に依存しているという点に於て、印象が、いわゆる内的あるいは私的な存在にすぎないとするならば、このことは、客観的に存在する外的対象なる概念と対立する。かつ、このようなものとしての印象以外の何物をも、直接的な所与として、我々が持ち合わせていないとするならば、このかぎりに於て、客観的に存在する外的対象なるものは我々の認識の対象たり得ない、ということになるであろう〔Book I, Part IV, Sect. IV〕。――以上のような立場、すなわち、「知覚の因果説」を認めるが、その帰結として、外的対象に関する不可知論的見解をとる立場、を、「外界」の問題に対するヒュームの第二の立場としよう。

上で述べたヒュームの議論にはいくつかの問題点が含まれている。第一の問題は、「知覚の因果説」が我々にとって一つの知識であるとみなし得るとするならば、それはいかなる意味に於てそうであるのか、という点である。ヒュームが、我々の印象はすべて身体に依存して存在するという結論を引き出すために提出している議論は、いわゆる「錯覚論法」に属するものである。この種の議論が、いわゆる外的（物理的）対象（我々の身体を含む）の存在を前提（あるいは少くとも仮定）していないかぎり、いかにしてその有効性を保ち得るのか私には理解しがたいが、もしそのように考えてよいとするならば、ヒュームは、先に述べた、「外界」の問題に対する第一の立場に反する存在をみずから許していることになるであろう。更に、くりかえして言えば、物質ないし物体と知覚との間にある恒常的連接を確かに我々は経験する故に、その意味に於て、物質ないし物体は知覚の原因で事実ある、とヒュームが認めていることである。この、物質ないし物体と知覚との間の恒常的連接を経験し得るという見解と、先の、そのようなものは経験し得ないとする第一の立場とは端的に矛盾する。しかし、以上のような問題点は次のように解釈しなおすことができるであろう。ヒュームは、例えば、「因果関係」を分析する場合、外的対象をそのモデルとしてとるが、この際、全体として、因果関係は、事物（objects）ないし事実（matters of fact）の間に成立する関係とみなされており、かつ、そのようなものとしての因果関係に関して、我々に経験し得る最大限が事物ないし事実間の恒常的連接である

という扱いになっている〔cf. e. g. 168(3)—169(1)〕。このようなヒュームの態度は、勿論、実在論を基盤とした、ごく普通の経験主義と解さるべきものである。さて、こうして、実在論を基盤とし、かつ、その上に立って、経験とその対象という二元論をとった場合、改めて、この二元論の枠内に於て、経験とその対象との間の関係そのものが分析され得よう。そして、このような二元的な枠組をとるかぎりに於て、「錯覚論法」と平行して、「知覚の因果説」は初めて有効に働き得ることになるであろう。ただし、「知覚の因果説」が、端的な経験的事実によって保証されていると言うのではない。そうではなくて、実在するとされる対象とそれに対する経験ないし（ヒュームの言う）印象の現れ方とを調和させるべく相当慎重に推論されたもの、いわば、一つの仮説として「知覚の因果説」は解釈さるべきであると思う。しかし、こう解釈しなおされたからといって、このことがただちに「知覚の因果説」の正当性を保証するわけではないのは勿論である。

「知覚の因果説」について第二に問題となる点は、それと知覚するということとの関係である。「知覚の因果説」を前提として印象と外的対象との関係を考えるかぎり、この両者は、因果関係を通じて間接的につながっているだけであるとみなさなければならない。のみならず、常に身体が媒介しているが故に、すべての印象は私的な存在であるとしなければならない。ところで、印象と外的対象とが間接的にしかつながらず、しかも、印象が私的なものにすぎないとするならば、印象を通じて外的対象を知覚すると言われる場合、この、知覚するということをもって我々は一体何を意味していることになるのであろうか。このような観点からすれば、「知覚の因果説」をとることが、かえって、知覚するということの説明を困難にしているとさえ言えよう。この意味に於て、ヒュームが、「知覚の因果説」から外的対象についての不可知論的見解を引き出していることは正当であるように見える。しかし、たとえ印象と外的対象とが間接的にしかつながらず、また、印象が私的なものにすぎないとしても、このことがただちに外的対象に対する我々の知識をすべて無にすることにはならない。それどころか、印象の間接性と私的性格とは、外的対象が客

観的に存在することを前提としているからこそ証明され得るものである。そして、「知覚の因果説」が、外的対象が実在することを前提とし、かつ、その上に立って、印象と外的対象という二元的な枠組をとるかぎりに於て、この二元的な枠組のうちで、知覚するということの意味を、多分、新たに定義しなおすことが可能であると考える。

この点はともかくも、客観的に存在する外的対象という概念を批判するにあたって、ヒュームは、「知覚の因果説」に対する懐疑的見解と肯定的見解とにそれぞれ応じて、二つの立場から批判しているということが知られるであろう。すなわち、くりかえして言えば、一つは、「知覚の因果説」に対する懐疑的見解に加えて、外的対象に関する不可知論的見解をとることにより、「知覚の因果説」及び外的対象についての一切の知識を認めない立場であり、もう一つは、「知覚の因果説」を認める（従って、外的対象の存在をある意味で認める）が、その帰結として、外的対象に関する不可知論的見解をとる立場である。実のところ、上の二つの立場は常に平行しているが、それぞれが含むところはある意味で反対であると言わなければならない。

印象と外的対象という二つの存在を許し、前者は心のうちにのみあるが、後者は客観的に存在するとみなすのみならず、両者の間に因果関係と類似という二つの関係があるとする考え方（ヒュームはこのような考え方を「二重存在説」と呼ぶ）をヒュームは批判する〔211(2)ff.〕。しかし、その際ヒュームによって提出されている議論を整合的に解釈することは困難であって、その理由は次の二つの点にある。(1)上の互いに相いれない二つの立場が同時に、しかも、交叉する仕方で提示されていること。(2)批判の対象たる当の「二重存在説」と、上のヒュームの第二の立場とは、その論理的な構造に関するかぎり、まさに同一であるとみなし得ること。――ただし、(2)についてつけ加えれば、「知覚の因果説」に伴って、外的対象を知覚するということに関して困難が生じることに留意しなければならない。

上の点に於て、ヒュームの議論には混乱が見られるが、全体として見るならば、「外界」の問題を論じるにあたって、ヒュームは、経験とその対象たる実在する事物という二元的な枠組を決してふみはずしてはいず、ただ、両者の

関係の分析を通じて、懐疑的あるいは不可知論的な見解におちいっているだけである、と解することができる。

しかし、「知覚の因果説」をめぐって現れる、上述の、「外界」の問題に関するヒュームの議論の二面性は、「自我」の問題と関連させる時、更に慎重な取扱いを必要とすることになるであろう。ヒュームによれば、（哲学者に対する）普通の人々（the vulgar）は、外的対象を、我々がそれを知覚するしないにかかわらず存在し続けるとみなすが、この際、外的対象と知覚（印象）とを混同し、知覚そのものが客観的に、すなわち、心あるいは知覚するという働きとはかかわりなしに、存在し続けるとみなしている、という〔193(2): cf. 202(1)〕。更に、ヒュームによれば、普通の人人のこのような見解は、心をもって、相互に分離して存在し得るような様々な知覚の束ないし集合（これがヒュームの「心」の定義である〔cf. 252(3)〕）とするかぎりに於て、論理的には何の矛盾も含まない、という〔206(1)—208(1): cf. 233(3)〕。すなわち、この立場からすれば、同じ一つの知覚（印象）が、ある時には、心を構成する知覚の束に加わる（これが我々にとって知覚するということを意味する）という仕方で存在することもでき、ある時には、その束から分離するという仕方で存在することもできる、ということになるであろう。勿論、この際、知覚は、相互に分離して存在し得るのみならず、知覚以外のいかなるもの（特に、実体とみなされるような自我ないし心、及び、身体を含む外的対象）とも分離して存在し得る、とヒュームによって想定されていると解されなければならない。しかし、ヒュームは、知覚そのものに客観的な存在を与える普通の人々の見解は、論理的には何の矛盾も含まないが、事実に於て誤りであるとして、知覚の身体への依存性を「知覚の因果説」を導入することにより証明しようとするのである〔210(2)〕。だが、すでに述べたように、「知覚の因果説」は、端的な経験的事実によって保証されてはいない。従って、知覚（印象）そのものに客観的な存在を与える普通の人々の見解は、論理的に何の矛盾も含まないのみならず、経験によっても反駁できないとしなければならない。それ故、このような見解を、少くとも誤りであるとするわけにはいかない、ということになるであろう。このような見解が誤りであることを証明するためには、ヒュームの論じ方

から言えば、「知覚の因果説」が事実に於て真であることが必要なのである。従って、ヒュームが、すでに述べた、「外界」の問題に対する第一の立場から、いわゆる「二重存在説」（普通の人々の見解に対して、これが「外界」についての哲学者達の見解だとヒュームは言う）を批判することは、結果に於て、普通の人々の見解に有利に働くことになってしまうであろう。さて、以上のような観点から「心」と「外界」との関係をとらえることは、いわゆる「中立一元論」（neutral monism）への道をひらくことになると考えられる。なぜなら、ある種の知覚は心を構成し、ある種の知覚は外界を構成するが、外界を構成する知覚のあるものはそのまま心を構成する成員の一部であり、また逆に、心を構成する知覚のあるものはそのまま外界を構成する成員の一部である、とみなすことができるからである。

しかし、くりかえして言えば、ヒュームは、知覚（印象）の身体への依存性を承認することにより、知覚が心に依存してのみ存在すること、あるいは、心のうちにあるという仕方でのみ存在すること、を強調し、この観点から、知覚そのものに客観的な存在を与える普通の人々の見解を誤りあるいは偽であるとしているのである〔210(2)〕。この、普通の人々の見解を誤りあるいは偽としている点をもって、すなわち、「知覚の因果説」を承認し、従って、知覚と外的対象という二元論をとっている点をもって、ヒュームの基本的な立場はやはりここにあると解することにしよう。ただ、ここで一つ注意しなければならないことがある。ヒュームによれば、我々に「因果関係」の観念を与える唯一の事情は過去に於ける原因と結果との恒常的連接という経験であるが、ヒュームの「因果」論の核心は、たとえこの恒常的連接という関係が因果間に見出されたとしても、この恒常的連接という関係は原因と結果との間の結びつきを論理的な意味に於て必然的なものとはしない、というところにある。従って、ヒュームが、「知覚の因果説」をとるにあたって、知覚と外的対象（身体を含む）との間の関係を恒常的連接と考えているかぎりに於て、論理的には、依然として、知覚がそれ自体で存在し得るとみなすことには何の支障もない。それ故、知覚が外的対象を原因として生じる、あるいは、外的対象に依存して存在する、と認めることにより、普通の人々の見解を批判する際、ヒュームは、

実のところ、知覚と外的対象との間に恒常的連接以上の何らかの関係を想定する必要があるように見える。しかし、この点に関するヒュームの真意は次のようなものであると解することができる。すなわち、ヒュームによれば、一般に、「因果関係」、あるいは、結果が原因に依存して存在すると言われる関係、は、原因と結果との間の恒常的連接という関係によって定義される、ということなのである〔cf. 169(3)—170(1)〕。勿論、このように定義されたからといって、因果間の関係が論理的に必然的なものとなるわけではない。それどころか、因果間の関係が論理的に必然的なものでないからこそ、我々にとって、その裏付けとして、習慣にもとづく信念というような心理的な原理が必要なのであり、この裏付けがあって初めて前述の定義も生きてくるのである。この意味では、知覚と外的対象との間の関係にかぎらず、むしろ「因果関係」一般に関してディレンマがあると言わなければならないであろう〔cf. 246(3) ff.〕。しかし、今問題としたいのはこのことではない。ここで問題としたいのは、ヒュームが、知覚（感覚の印象）は身体の存在に依存して、あるいは、少くとも平行して、のみ存在すると認めていることと、「自我」あるいは「心」の同一性（「人格の同一性」）との関係である。ヒュームによれば、「心」とは、相互に分離し得るような諸知覚の束である。また、これらの知覚は、感覚の印象と、内省の印象（情念）と、観念とに分類される。ところで、因果的に言えば、観念は、感覚の印象と内省の印象との結果であり、内省の印象は、感覚の印象の結果である。従って、観念と内省の印象とは、因果的には、感覚の印象の結果であり、更に、この感覚の印象は、因果的には、身体の存在に帰着する。それ故、心を構成する知覚のすべては、因果的には、結局、身体の存在に帰着する、ということになろう。このような観点から言えば、心は単なる知覚の束ではなく、その背後に常に身体が存在しているとみなされなければならない。もしそうであるとするならば、この、背後に常に身体が存在しているということが、知覚の束をもってそのまま同一の心であるとみなすことを可能にするように思う。心を構成する知覚は次々と継起する。しかし、知覚が継起するたびに次々と互いに異なる心が成立するのではなく、継起する知覚は同一の心を構成する単なる成員であるとみなさる

べきであり、このような観点を我々に許すのが身体の存在なのである。あるいはむしろ次のように言うべきかも知れない。すなわち、心を構成する様々な知覚はすべて身体の存在に依存して、あるいは、少くとも平行して、のみ存在するが、このような、身体との「因果関係」という観点からすれば、心は様々な知覚によって構成されていると言われるのみならず、その、様々な知覚によって構成されている心ということをもってそのまま同一の心ということの定義とすることができる、ということである。勿論、以上のような考え方をとるためには、身体の存在とその同一性、及び、知覚と身体との間の因果関係、等の問題を改めて検討することが必要となってくるであろう。しかし、これらは広汎な問題であって、ここではこれ以上は述べない（「人格の同一性」に対する上のような見方については、後に「自我」の問題を扱う時に再述する）。

さて、上で述べたように、身体との関係から自我ないし心の同一性の問題を考えることができるが、これだけで問題が終るわけではない。「人格の同一性」が問題となるのは、言うまでもなく、実体とみなされるような自我なる概念との連関に於てなのである。ヒュームはこのような自我なる概念を鋭く批判する。しかし、そうであるにもかかわらず、やはりヒュームのうちに於て、知覚するという働きの主体、あるいは、広く認識するという働きの主体、としての自我ないし心、という問題が生じてきているのである。この点については後述しよう。

（1）ここ〔67(4)〕でヒュームは次のように言う、「哲学者達がひとしく容れ、また事柄自体からしてもかなり明白なことであるが、実際に心に現れる（在る：present with the mind）ものは知覚すなわち印象と観念と以外にはなく、外的対象はそれらがひきおこす知覚によってのみ我々に知られるようになるだけである」。つづけてヒュームは、心に現れるすべてが知覚であることを強調する。しかし、後に問題とする「知覚の因果説」との連関から言えば、上で引用した箇所ですでにヒュームは、知覚に関して「それら（外的対象）がひきおこす」と述べているのである。

（2）ヒュームが「感覚的性質」と言う時、色・音・形等を指すが〔cf. 222(2)〕、ヒュームによればまた、これら色・音・形等は、知覚（この場合は、すぐ述べる、感覚の印象）である、とされる〔192(2)〕。従って、ヒュームの言う感覚的性質と感覚の

印象とは同じものでなければならない。しかし、この、感覚的性質と感覚の印象とが同一であるということの意味は、次のように解することができる。すなわち、ヒュームの言う感覚的性質とは、外的対象に関して、感覚の印象に現れたかぎりでの性質（我々に感覚し得るかぎりでの性質）を指す、ということである［cf. Book I, Part IV, Sect. IV］。

（3）　後に「信念」(belief) の説と関連して重要となってくるこの知覚の特性をヒュームは 'force' の外さまざまな言葉で表わす［cf. 629(1)］。

（4）　ヒュームの言う 'belief' についてくわしくは、Book I, Part III, Sects. IV—X 及び Appendix の前半を参照されたい。

（5）　以下の議論に関しては次をも参照されたい：David Hume, *An Enquiry concerning Human Understanding*, ed. L. A. Selby-Bigge (*Enquiries*, 2 nd ed., Oxford), pp. 150–155.

（6）　ヒュームによる「因果関係」の分析についてくわしくは、Book I, Part III（手短かには Sect. XIV）を参照されたい。なお、ここでつけ加えれば、ヒュームが、因果間の必然的な結合は（対象のうちには）見出されない、と言う時、そこで言われている「必然性」ということでヒュームが何を意味しているのか、実を言えば、私の解釈は定まっていない。本論文では、論理的な必然性（「分析的」）と解したが、ヒュームがたえず批判する、原因が結果を生む「力」(power) という概念がもし「経験的」な内容を含んでいるとするならば、ヒュームの「因果」論の解釈は更に複雑なものとなるであろう。

（7）　ここで述べたように、ヒュームは、身体と知覚との間に因果関係があることを認めるが、この点をのぞけば、ヒュームの議論のうちに於て、身体が心に対してどのような位置に立ち、また逆に、心が身体に対してどのような位置に立つのか、を正確に定めることは実のところ困難である。この点は本論文の進行に従って幾分か明らかになるであろう。

二　外界

ヒュームが、『人性論』に於て、「外界」の問題を論じる際、その中心となるのは、第一巻・第四部・第二節（Book I, Part IV, Sect. II: *Of scepticism with regard to the senses*）である。今まで述べてきたことは、この節に於けるヒュームの議論にすでにかなりくいこんでいるが、ここで改めて、この第二節に於けるヒュームの議論を順を追って見

ることにより、「外界」の問題に関するヒュームの見解をより具体的に検討していくことにしよう。

ヒュームは、この節の議論を始めるにあたって、次のような注意を与えている。すなわち、我々が物体の存在を信じるようになるのはどのような原因からか、と問うのはよいが、物体があるかないか、と問うのはむだである、と〔187(2)〕。ヒュームが言う意味は次のように解することができよう。すでにそのおよそを見たように、また、これから見ていくように、ヒュームは、外的対象に関する普通の人々の見解にせよ哲学者の見解にせよ、いずれも「理性」(reason：推理する能力)によっては支持され得ないと考える。このかぎりに於て、外的対象の存在とは、「理性」とある意味で対立する能力たる「想像」(imagination)から来る「信念」の対象とみなされなければならない。――ただし、この、外的対象の存在をもって「信念」の対象とすることにヒュームはむしろ積極的な意味を与えているのである。ヒュームの考えによれば、このような「信念」は「自然」(nature)によって支えられている。この場合、nature の意味を二つの側面からとらえることができる。すなわち、一つは、human nature(「人間性」)という側面であり、一つは、human nature をもつつみこむ文字通りの nature(「自然」)という側面である。ヒュームが外的対象の存在をもって「信念」の対象とする時、この「信念」は「人間性」に根ざしており、従って、「自然」にかなっている、とヒュームは考えるのである。「自然」が我々をあざむかぬかぎりに於て「外界」は存在するのである。――しかし、ヒュームは、「外界」に関する普通の人々の見解と哲学者の見解とをともに分析した結果、「外界」に関して懐疑的にならざるを得ないことをみずから告白する〔217(2)―218(2)〕。そして、ヒュームによれば、このような懐疑から我々を救ってくれるのはただ無頓着(carelessness)と不注意(inattention)のみだという。

以上のような点は、ヒュームの哲学に於けるいわゆる「自然主義」(naturalism)[1]の問題を論じる際には重要であろう。しかし、ここでは、「外界」の問題に対するヒュームの論理的な分析に注意を集中しよう。さて、ヒュームは、我々をして物体の存在を信じさせる原因をたずねるが、初めに次の二つの問を区別する〔187(3)―188(1)〕。(1)なぜ我

我は、それが感官（the senses）に現れていない場合にも、対象に対して「連続的な」存在（*continu'd* existence）を与えるのか。(2)なぜ我々は、対象が心ないし知覚（するという働き）と「別個の」存在（existence *distinct* from the mind and perception）を持つと想定するのか。なおヒュームは、(2)の、対象が「別個の」存在を持つということをもって次の二つを意味させている。(イ)その存在と作用の「独立」（*independence* of their existence and operation）。(ロ)その「外的」位置（their *external* position）。上の(1)と(2)との二つの問は密接に関係していて、一方の答が同時に他方の答となる（なぜなら、もし感官の対象が、知覚されない場合にも存在し続けるとするならば、その存在は知覚から独立・別個であろうし、また逆に、その存在が知覚から独立・別個であるとするならば、対象は知覚されなくても存在し続けるにちがいないからである）が、この二つの問を区別して進んだ方が便利である、とヒュームは言う。そして、物体に関する(1)や(2)のような見解を我々にもたらすのは「感官」、「理性」、及び「想像」のいずれであるかを考察する。ヒュームは、これらの問だけが、「外界」の問題に関して、理解できる（intelligible）問であると言う〔188(1)〕。なぜなら、ヒュームによれば、我々の知覚と種類が異なる何物か（something specifically different from our perceptions）とされる外的対象という考えは不合理であるからに他ならない。すなわち、ヒュームによれば、我我の心には知覚しか現れないが故に、我々にとって外的対象とは、我々がそれを想い（conceive）得るかぎりに於て、知覚とまさに同じであるとするか、あるいは、知覚によって表象（represent）されているかぎりでの何物かであるとするか、いずれかしかないのである〔cf. 67(4)—68(2)〕。

さて、ヒュームはまず「感官」から検討する〔188(2)—193(1)〕。感官が、外的対象の連続的な存在という見解をもたらさないのは明白であろう。なぜなら、もしこのような見解をもたらすとするならば、感官は、その作用を止めた後にもなお作用し続ける、としなければならないからである〔188(2)〕。従って、感官がこの場合関係しているとするならば、外的対象の別個の存在という見解をもたらすということになろう。そして、そのためには、感官は、印象を、

別個の存在を持つ何物かのイメージないし表象として提示するか、あるいは、印象を、別個の存在を持つ外的対象そのものとして提示するか、いずれかでなければならない〔188(2)—189(1)〕。しかし、感官は、常に一枚の知覚を伝えるだけであって、印象を何物かのイメージとして提示することはない〔189(2)〕。従って、感官は、一種の虚偽と錯覚とによって、印象を、別個の存在を持つ外的対象そのものとして提示しなければならない、とヒュームは言う〔189(3)〕。そして、そのためには、感官によって両者が比較されるべく、対象と我々自身（自我）とが共に感官に現れていなければならない。しかし、まず第一に、人格の同一性の問題は非常な難問であって、これに対して満足な答を与えるためにはむずかしい哲学に頼らなければならず、普通我々は自我ないし人格（person）ということに関してそれほど明確な観念を持っているわけではない。従って、そもそも感官が我々自身と外的対象とを区別できると考えること自体不合理である〔189(4)—190(1)〕。第二に、感官の伝える印象は、本来それが知覚であるが故に、まさに知覚としてしか心に現れない。換言すれば、感官は、印象を、自我と別個の存在を持つものとして示すことはできないし、また、事実示さない〔190(2)—191(2)〕。

かくて、感官は、外的対象の連続的な存在という見解も別個の存在という見解ももたらさない。ヒュームは更に次の点をつけ加える〔192(2)—193(1)〕。感官の伝える印象は、(1)物体の形・嵩・運動・固体性等の印象、(2)色・味・におい・音・熱さ・つめたさ等の印象、(3)（身体的な）快・苦の印象、この三つの種類に分けられるが、(1)に関しては哲学者も普通の人々も、また、(2)に関しては普通の人々のみが、別個で連続的な存在を与え、(3)に関しては哲学者も普通の人々も、それらが単に知覚であり、従って、中断しかつ心に依存する存在であるとみなしている。しかし、まず第一に、感官への現れ方に関するかぎり、(1)と(2)とは同じ仕方で存在するが故に、(1)と(2)との区別は感官からは来ない。第二に、(2)と(3)とは本来同じ立場にあるが故に、(2)と(3)との区別は感官からは（そして理性からも）来ない。なぜなら、(2)と(3)とはどちらも、身体（物体）の部分の何らかの配置と運動から生じる知覚にすぎないと認められて

いるからである〔192(3)—193(1)〕。——かくて、感官の立場から見れば、上の三つの種類の印象はすべて同じ仕方で存在しその間に何の区別もない。従って、我々がその存在に関してこれら三つの印象の間に行なう区別は感官のみから来るのではないと言わなければならない。

次に、「理性」について見れば〔193(2): cf. 210(2)ff.〕、上の音や色等の印象の場合に明らかなように、少くとも普通の人々は、理性ないしは哲学と少しもかかわりなしに対象の別個で連続的な存在という見解に到り得る、としなければならない。というより、普通の人々の考えは、哲学の教えるところと端的に反対である。なぜなら、哲学は、心に現れる一切のものが知覚であり、それらは中断しかつ心に依存する、とみなすが、普通の人々は、知覚と対象とを混同し、自分が触れたり見たりするその当のもの（すなわち知覚）に別個で連続的な存在を与えているからである〔cf. 202(1)〕。更に、次の点をつけ加えることができる。理性が、心に現れる唯一のものである知覚の存在から、別個で連続的な存在を持つとされる対象の存在を推論することは不可能である。なぜなら、そのような推論を理性に行なわせるものはすでに述べたように因果関係のみであるが、もし、知覚と対象とを同一視するならば、一方から他方へと推論する余地は全くなく、また、たとえ知覚と対象とを区別するとしても、心に現れるのは知覚のみであるが故に、因果関係の観念を我々に与える唯一の事情である恒常的連接を知覚と対象との間に観察することはできない、からである〔cf. 212(2)〕。

かくて、「感官」も「理性」も、物体の別個で連続的な存在という見解をもたらさない。従って、このような見解は「想像」から来る、とヒュームは言う〔193(2)〕。そして、以後ヒュームは、普通の人々がある種の知覚（印象）に別個で連続的な存在を与えるに到る過程をもっぱら心理的な観点から解明していく。

さて、ヒュームによれば、すべての印象は内的かつ消滅する存在であり、また、そのようなものとして現れるのであるから、それらが別個で連続的な存在を持つという見解は、それら印象の持つある性質と想像の持つある性質とが

相協力するところから生じるにちがいない、という〔194(1)〕。また、我々は、すべての印象に別個で連続的な存在を与えるわけではないのであるから、このような見解は、ある種の印象に特有な何らかの性質から生じるにちがいない。それでは、その、ある種の印象に特有な、すなわち、別個で連続的な存在を与えられる印象に特有な、何らかの性質とは何か。

まずヒュームは、ある種の印象の非随意性、あるいは、すぐれた勢いとはげしさをもってその性質とすることはできない、と言う〔194(2)〕。なぜなら、我々は、快苦や情念に対して、知覚としてある以上の存在を与えないが、それら快苦や情念は、すぐれたはげしさをもって作用し、かつ、形や延長、あるいは、色や音等の印象（これらに我々は別個で連続的な存在を与える）と等しく非随意的である、からである。

ヒュームによれば、求める性質は「恒常性」(constancy) と「整合性」(coherence) との二つである、という〔194(3)—195(2)〕。しかし、これら二つの性質についてのヒュームの議論に立ち入る前に、今まで述べてきたようなヒュームの考え方のうちに含まれている問題点を少し見ておかなければならない。

ヒュームは、前述のように、「外界」の問題に関して、連続的な存在と別個の存在という二つの観点から論じるが、この際、設問自体からして、ヒュームの議論の中心が、心ないし知覚（するという働き）と外的対象との関係の分析、あるいは、心、外的対象、及び両者の間に介在する知覚（印象）、これら三者の関係の分析、にあることは言うまでもない。しかし、ヒュームが、自分の言う知覚に対して、心及び外的対象との連関に於て、その置かれるべき地位ないし身分を明確な仕方で与えていないために、ヒュームの設問自体のうちにあいまいさが現れてきているように思われる。この点を理解するために、ヒュームのかねての主張である、我々の心には知覚のみしか現れない、という原理をとりあげてみよう。ヒュームは、更に、自我ないし心の問題を検討した結果、自我ないし心をもって、それら知覚が帰属するような実体でもなく、あるいは、知覚が現れる場所でもなく、まさに諸知覚自体が構成する束ないし集合

である、と主張する〔251(2)—253(1)〕。加えて、ヒュームによれば、前述のように、各々の知覚が上の束ないし集合から離れてなおかつ存在するとみなしても論理的には矛盾を含まない、という〔206(1)—208(1): cf. 233(3)〕。さて、ヒュームの言うように、我々の心には知覚のみしか現れず、かつ、心と知覚とがそれぞれ上のようなものであるとするならば、知覚するという働き（the perception〔cf. 188(1)〕）、あるいは、知覚であること（being a perception〔cf. 190(2), 636(4)〕）、これらをもって我々はどのような事態を表わすことができるであろうか。ヒュームは、「外界」の問題に関して、二つの問を立てるにあたって、知覚が知覚としてあるかぎりに於て、それらは内的なものであり、かつその存在は心に依存している、そして、まさにそのようなものとしてしか心に現れない、ということをむしろ当然と考えているように見える〔cf. e. g. 189(3), 190(2), 194(1)〕。だからこそ、ヒュームは、上のようなものとしての知覚しか我々の所与は存在しないにもかかわらず、それらの所与と相反する性格を持つとされる外的対象の存在という信念になぜ我々は到るのか、という問を立て得たと解されるであろう。このようなヒュームの態度は、ヒュームが指摘するように、我々は、快苦や情念には内的な存在しか与えないが、同じ知覚であるにもかかわらず、感覚の印象のあるものを、ある仕方で、（心の）外にある何物か（それが何であるにせよ）と関係させている、という事実によって一応肯定される。しかし、一方に於て、ヒュームは、知覚は、それ自体として見られるかぎりに於て、何物にも依存することなく、かつ、心から離れて、存在し得るようなものとして現れると主張しているのである。このような観点から言えば、ヒュームの言う知覚とは、心と外的対象、あるいは、内的と外的、という区別をそのうちに含まないいわば中性的（neutral）な存在であるとみなされるであろう。快苦や情念ですら内的で心に依存するとただちに言うわけにはいかないのである。さて、「外界」の問題に関するヒュームの二つの設問のうちにあいまいさが現れてきていると先に言った意味は次の点にある。すなわち、自我ないし心についてのヒュームの見解からすれば、ヒュームの言う知覚とは一元論的に解され得るようなものであるが、外界に関して二つの問を立てる際には、ヒュームは、知

覚をもって、外的対象と対比的に、すなわち、二元論的に、扱っている（ように少くとも見える）、ということである。この、ヒュームのうちに現れる、知覚に関する一元論的見解と二元論的見解との共在が、ヒュームの議論に於て、知覚するという働き、あるいは、知覚であること、これらをもってヒュームが表わそうとしている事態が何であるかの解釈を困難にしているのである。そして、なかんずく、感覚の印象に関して、ヒュームが、一元論的見解と二元論的見解との間を、「知覚の因果説」をめぐって、ゆれ動いていること、しかし、基本的には、ヒュームの見解は、知覚（印象）と外的対象という二元論であると解されること、これらについてはすでに述べた。

しかし、上で述べた問題点こそ本論文の関心の中心を占めるものなのであるから、この点をここでもう少し検討してみることにしよう。ヒュームが言うように、もし我々の心にただ知覚しか現れないとするならば、その条件のうちで、我々は、心と外的対象、あるいは、内界と外界、といった区分に関してどの程度のことが語り得るであろうか。この問はいくつかの面からとらえることができる。ヒュームの言う知覚に関して、「志向性」、あるいは、意識とその対象という二元性、の問題が、彼の「信念」の説のうちに現れてきていることはすでに述べた。そこで示したように、印象に伴う信じるということが、一般に、印象を通じて何物かの存在を信じるということに他ならないとするならば、この意味に於て、印象そのもののうちにすでに二元性が含まれていることになろう。この点と関連して注目されるのは、外的対象に関して我々は、それが心の外（external）にあるとみなしている、とヒュームが指摘していることである。この問題に関してヒュームは、感覚の印象が、外的対象を身体の外にあるものとして直接示すということを否定しており〔190(4)—191(1)〕、従って、このかぎりに於て、ヒュームの言う外在性とは、空間的な意味に於けるそれと解し得るが、それ以後ヒュームはこの問題に関しては何も論じていない。それ故、外的対象が心の外にあると言う時ヒュームの意味するところにはあいまいさが残るが、同時に、一般的に言って、心の外という概念そのものにすでにあいまいさとむずかしさとが含まれているように思う。しかし、ここで心の外という概念そのものを論じようとは

思わない。今述べたいのは次のようなことである。すなわち、我々が、外的対象を心と対比的な何物かとしてとらえることができるのみならず、感覚の印象をもって外的対象と心との接点であるとみなすことができるかぎりに於て、感覚の印象は、心の外にある、と言うことが許されなければ、少くとも心とは異なる、何物か（外的対象）について の意識でなければならない、ということである。感覚（sensations）に於けるこの種の二元性の否定ということが「中立一元論」の要点の一つであることは言うをまたないが、同じ線上でヒュームを解釈することにはやはり問題が含まれていると言わなければならない。『人性論』全体の出発点に於てヒュームが、印象を、感覚の印象と内省の印象（情念）との二つに分けていたことを思い出そう。そして、例えば、「因果関係」をヒュームが分析する際には、外的対象の恒常的連接を我々に知らせるものは感覚の印象であり、因果間の必然性の印象は内的印象すなわち内省の印象である、とされているのである〔cf. e. g. 165(3)—166(1), 167(2)〕。この時ヒュームが、実在論を基盤とした二元論に立っていることはすでに述べた。この「因果関係」の分析に現れてくるような外的印象（外的対象についての印象）と内的印象との区別、従って、外的対象と心との区別、を、ヒュームはほぼ『人性論』全体にわたって自明のこととして認めているように見え、そのようなヒュームの態度が、「外界」に関する二つのヒュームの設問のうちにも現れているように思う。

以上のような観点に立つ時、快苦の印象と内省の印象とに関して少し注意が必要である。ヒュームの扱いによれば、快苦とは身体的なそれであり、かつ、その印象は感覚の印象であるが、我々はそれをもって内的存在とみなしている、という〔cf. 192(2)〕。もしこれが事実であるとするならば、このことは次の点を暗示しているように思う。すなわち、我々にとって、心の内と外という区別の境目に立つものは身体であり、かつ、内的意識に現れたかぎりでの身体と心とはまさに同一である、ということである。内省の印象については次の点が注意されなければならない。すなわち、ヒュームの「信念」の説との連関に於て、感覚の印象は、心の外にある何物かについての意識であると解し得るが、

内省の印象は、心の内にあるもの（知覚）についての意識であるとは解し得ない、ということである。ヒュームの言う内省の印象とは情念であり、ヒュームの説明によれば、情念は、一般に、自我と外的対象という二元的な関係のうちで働き、かつ、そのうちのあるものは自我をその対象とする、という〔cf. e. g. Book Ⅱ, Part Ⅰ, Sect. Ⅱ〕。しかし、ヒュームのこのような情念についての議論は、自我と外的対象との存在がすでに前提された場に於ける、情念というものの働き方ないしメカニズムについての説明であると解さるべきであって、情念をもっていわゆる内観と対応させることはできないと思う。むしろ、ヒュームが、我々の確実に知っている唯一の存在は知覚であり、それらは意識によって直接我々に現れる、と主張していること〔212(2): cf. 189(3), 190(2)〕、そして、ヒュームの哲学全体をつらぬく方法がまさに内観的方法であること、は、もしヒュームの哲学に於て内観ということが問題となるとすれば、それはごく普通の意味に於けるそれであると解さるべきことを示していよう。勿論、内観という心の働きを認めることは、外的対象に対する知覚するという働きと相まって、それら働きの主体としての心、あるいは、実体としての心、というやっかいな問題をひきおこさずにはいない。

上で述べたことから明らかなように、知覚の身分を定めるにあたって、一つの側面として、当然のことながら、各の知覚はそれぞれ固有の役割をになって働くという点に着目することができる。例えば、感覚の印象は、外的対象を認識するということにかかわるし、情念は、心をゆり動かし、我々を様々な行動にかりたてる、等々。心に現れる一切のものは知覚であるというヒュームの主張を最も厳格にとるならば、諸知覚を区別する内在的な差異はただそれら知覚の持つ勢い（force）の程度の差のみである、という帰結が生じるかも知れない。しかし、ヒューム自身そこまでは徹底していない、というよりむしろ逆であって、ヒュームが内観的方法を使って人性を解明する際、諸知覚を様様に区分するが（印象と観念、単純知覚と複雑知覚、感覚の印象と内省の印象、記憶観念と想像観念、等）、ヒュームの議論の関心の中心を占めるものは、これら諸知覚の各々がそれぞれ持つ固有の働き方ないしメカニズムの解明な

のである。諸知覚の働き方ないしメカニズムの解明、というのは不正確な言い方であって、むしろ、心の持つ様々な能力（faculties）の解明、と言いなおすべきであろう。このような見方からすれば、心の働きという視点と心が働く場ないし情況という視点がどうしても必要であるし、また、働きの主体としての心という概念がますます重要となってくる。

ヒュームがとっている認識論上の基本的な観点から言えば、知覚の身分に関して、勿論、最も重要な側面は、知覚と因果関係との関係である。因果的には、他のすべての知覚は感覚の印象に帰着すること、そして、感覚の印象に関するヒュームの基本的な見解は「知覚の因果説」に対して肯定的であり、かつ、身体への依存性が強調されていること、これらについてはすでに述べた。

以上のような議論を通じて、次のことが予想されよう。すなわち、知覚に対して、心及び外的対象との連関に於て、その地位ないし身分を十分な仕方で定めるためには、結局、世界がそれらから成っていると我々が普通想定しているところの諸要素のすべてを必要とするであろう、ということである。そして、これらの諸要素のうち、どれを正当なものとして取り入れ、どれを不当なものとして排除するか、その基準はもとよりさだかではない。このような意味に於て、先に私が、身体との関係に於て、様々な知覚によって構成されている心ということをもってそのまま同一の心ということの定義とすることができる、と述べたのは、知覚の身分に関する一つの見方からなされ得る議論であって、そのような限定つきで初めて有効なものとなることをつけ加えておかねばならない。

「外界」の問題に対するヒューム自身の議論に戻ることにしよう。ヒュームは、さしあたり、外界に関する普通の人々の見解をとりあげるが、ヒュームによれば、普通の人々は、知覚（感覚の印象）そのものに別個で連続的な存在を与えている、という〔193(2), 202(1)〕。普通の人々のこのような見解は、その人の態度そのものに即して言えば素朴実在論と解されるが、その論理的な構造から言えばむしろ現象主義と解されねばならない。この、ある意味で奇妙な、

実在論と現象主義との混淆が、ヒュームによってもっぱら心理的な観点から解明されていく。先に述べたように、ヒュームは、「恒常性」と「整合性」という二つの性質を感覚の印象に関してあげるが、この二つの性質をめぐってヒュームがまず明らかにするのは、普通の人々が感覚の印象に連続的な存在を与えるに到る過程である〔194(4)—206(1)〕。この点に関するヒュームの議論をくわしく述べる余裕はないし、また、本論文の関心はヒュームによるこのような心理的な解明にはないので、ごく簡単に述べることにする。「恒常性」とは、ある時間的な経過に於ける印象の無変化性であり、一方「整合性」とは、ある時間的な経過に於ける印象の変化の規則性である。[2] ところで、我々がある対象を中断して観察した場合、「恒常性」に関して言えば、完全に類似した二つの印象が中断の前後に見出され、[3]「整合性」に関して言えば、中断せずに観察した場合と同じ変化の規則性が、中断された印象の変化のうちにも見出される。印象のこれら類似性と規則性とにもとづいて、ヒュームの心理学に於ける中心的存在たる、「想像」が働き始め、やや複雑な過程を経て、印象の中断を我々の知覚しない印象によって埋め合わせるに到る、換言すれば、印象の連続的な存在という見解に到達する。——以上のようなヒュームの心理的な説明がどこまで正当なものであるのか私にはよくわからない。ただここでは次の点を指摘しておこう。すなわち、「知覚の因果説」をとる立場から言えば、感覚の印象におけるヒュームの言う「恒常性」や「整合性」は、それらが印象の現れ方の規則性を意味するかぎりに於て、むしろ感覚の印象に外的原因があることの証拠とみなされるであろう、ということである。

つづいてヒュームは次のように論じる。すなわち、心をもって様々な知覚の束ないし集合とするかぎりに於て、感覚の印象が、心に現れていない間もなおかつ存在する、換言すれば、連続的に存在する、とみなしても、そこには少くとも論理的には何の矛盾も含まれていない、と〔206(1)—208(1)〕。ところで、外的対象の連続的な存在という見解と、その（心ないし知覚するという働きから）別個のないし独立した存在という見解とは密接に関係していて、一方が成立すれば必然的に他方も成立する。従って、知覚そのものに連続的な存在を与える時、自然に我々は知覚そのも

のに別個のないし独立した存在をも与えるであろう〔210(2): cf. 188(1)〕。

しかし、知覚が別個のないし独立した存在を持つという考えは、最も平易な経験に反している、とヒュームは言う〔210(2)〕。そして、ここで、上の普通の人々の考えを批判するために、「知覚の因果説」あるいは知覚の身体への依存性という見解が導入されるのである〔210(3)—211(1): cf. Book I, Part IV, Sect. IV〕。知覚は身体ないし心に依存してのみ存在するのであるから、その連続的な存在という考えも捨てなければならないということになろう〔211(2)〕。ヒュームはひきつづき、哲学者の見解たる「二重存在説」の批判にとりかかる〔211(2)ff.〕。「二重存在説」とは、知覚と対象とを区別し、前者は心に依存して存在する、従って、中断するが、後者は心から独立して存在する、従って、連続的に存在する、とみなす〔cf. 211(2)〕とともに、両者の間に因果関係と類似という二つの関係があるとする〔cf. 189(2), 216(3)—217(1)〕考え方である。ヒュームによれば、このような哲学者の見解は、知覚そのものに連続的な存在を与える普通の人々の見解（「想像」から来る）にもとづき、かつ、更にその上に「想像」によって上積みされたものであって、「理性」からは来ない、という。しかし、「二重存在説」に対するこのヒュームの批判のうちに不整合ないし混乱が含まれていることはすでに指摘した。

もし論理的な整合性を求めるならば、ヒュームの議論からは次の帰結を引き出し得るのみであると思う。すなわち、すべての知覚は相互にかつ他のいかなるものとも分離して存在することができ、そして、そのようなものとしての知覚のみしか心に現れないが故に、「記憶」を問題としないとすれば、「理性」にとって、これまでに心に現れてきた、あるいは、心を構成してきた、諸知覚のみが確実な存在であり、かつ、この範囲を越えて何事かを推論することはできない、ということである。このような見方からすれば、「外界」に関する普通の人々の見解も哲学者の見解も「理性」によって少くとも保証はされていないことは確かであろう。しかし、上の帰結に対して、本当のところ、我々はどのように考えるべきなのであろうか。私自身の見解を述べるとすれば、心と外的対象との間に於ける知覚の身分に

関して先に述べた点に戻らざるを得ない。すなわち、「外界」の問題（及び「自我」の問題）を論じるにあたって、外的対象と心と知覚とが、事実に於て、いかなる関係に立っているか、の分析がまずなされなければならない、ということである。勿論、たとえこの分析が十分なされたとしても、上述の帰結はやはり避けがたいものであるかも知れない。しかし、この分析が十分なされないかぎり、そもそも何が問題なのであるかさえ明確ではない。さしあたって私が言い得るのは上のようなまさに平凡なことのみである。

（1）例えば Kemp Smith は、'*natural* belief' を中心にすえてヒュームの哲学を解釈しようとする。私がここでヒュームの 'naturalism' と言うのはこのような意味に於てである。Cf. Norman Kemp Smith, *The Philosophy of David Hume* (London, 1941).

（2）ここでのヒュームの扱いでは、この印象の変化の規則性と、外的対象のうちに我々が直接見出すかぎりでの因果関係とは同じものとされているように見える。ただし、ヒュームは、外的対象の連続的な存在という見解を、因果的推論からただちに説明せず、別の心理的原理を導入して説明する〔cf. 195(3)—198(2)〕。

（3）本論文、次章の注（1）参照。

（未完）

（筆者　京都大学文学部〔哲学〕助手）